

「連棟の家」

26の連棟形式から生まれる内外の広がり
個人が営む美容院とその家族の住宅で、さらにバス停を取り込み、通り抜け散歩道を設える計画。
外部空間と内部が同じようなスケール・密度感で反復するような2〜4畳半の小さな26の棟の連なりとし、周囲の2〜3重に建て込む旗竿地への圧迫感を低減しながら緩衝帯となるような外部を多く作った。
小さな26の棟は近隣旗竿住宅地の密度感を和らげ空地環境を提供し、対角線上に横断する散歩道は近道を作りながら広大な田んぼの景色とつなげ、圧倒的に小さい26の建築群に対して大きな樹々は周囲の都市スケールと拮抗する。
独立した棟を連ねて並べていく「連棟」形式の特徴は断面図に現れる。ある断面では庭と内部空間が同じようなスケールで反復する分棟として建ち現われながら、ある断面では長いワンルームとして建ち現れる。連続した内部空間でありながら、スケールの似た内部と外部の反復と反転が起きることによって、ヴォリュームや面積を超えた広がりを感じる空間体験に繋がるのではないかと思っている。
構造は、在来軸組み工法ですべての四隅柱を90mm角とし小さな空間スケールに対応したメンバーにした。26の棟を8つの群としてとらえて、各群内・群と群の補完関係を確認し耐力壁を配置している。たとえば、ダイニング棟は耐力壁がなく開口部のみでつくられているが、水平力は隣接するキッチンや子供部屋に伝達されており、連棟形式によって強い棟と弱い棟が寄せ集まることでみんなで支えあうような相互補完関係が成立している。
敷地には毎日バスが停車して待っているお客さんを乗せ、美容院には1時間ごとに違ったお客さんがやってくる。近くの実家に住む建主のおじいちゃんは樹木に水をあげにくくなった。隣接する旗竿住宅のひとつがピアノ教室を営んでおり子供たちが敷地の脇の木々を見ながら通り抜けていく。
都市の粗密の間にできたスポンジのようなポラスな極小環境が、周囲のさまざまな環境を吸い込み、ここで営まれる小さな生活と混ざっていく。



敷地前のバス待ち。敷地内に東屋とベンチを設える。



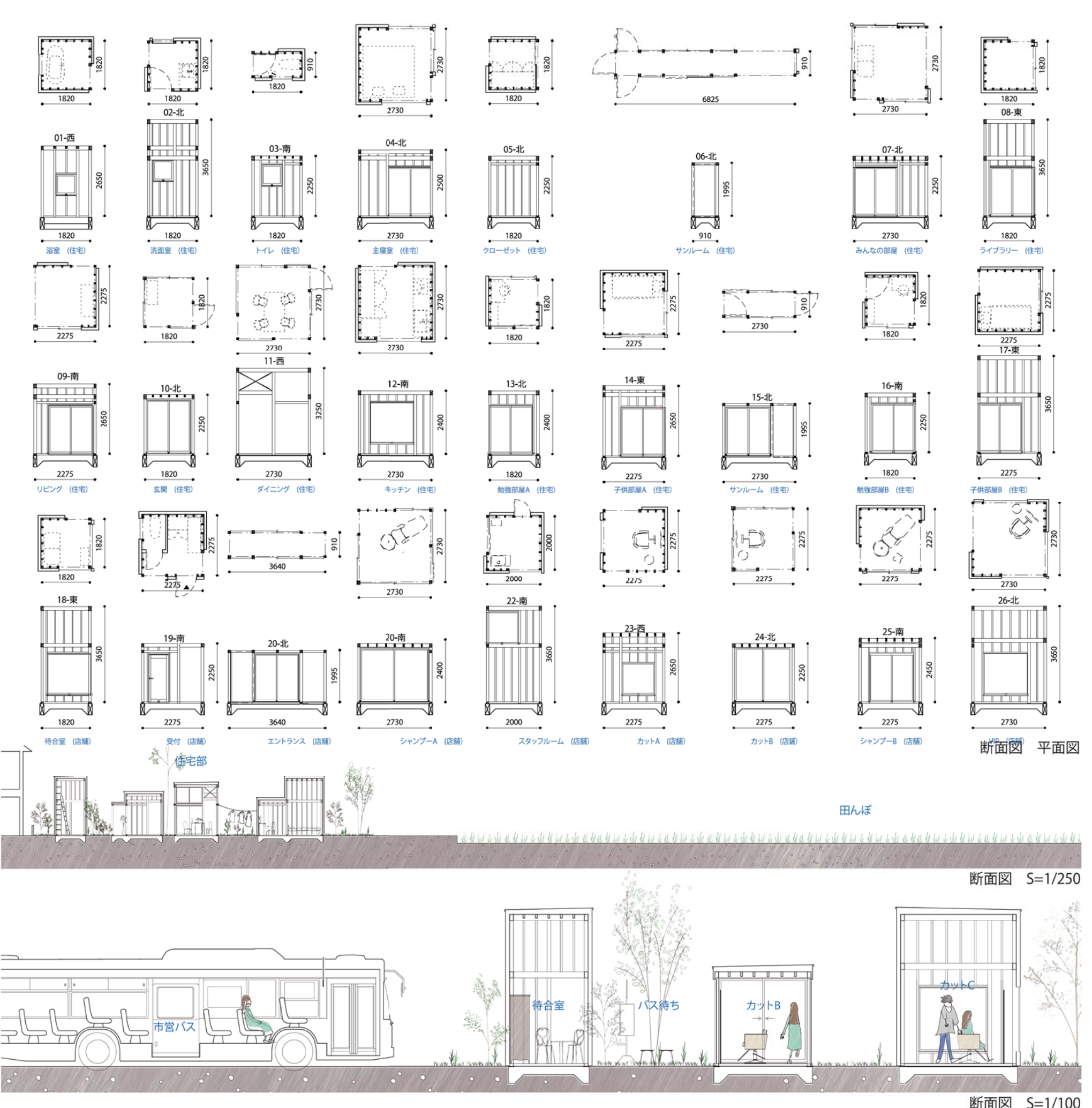
南西からの俯瞰 美容院と住宅の間に散歩道が通り抜ける。



竿敷地に建て込んだ住宅地、田んぼや駐車場などの大きな空間、大きさや密度間がまちまちな場所である



南側外観 乗客は敷地内の東屋でバスを待つ



みんなの部屋からリビングを見る 間柱は45×90mm角のものを278〜351mmピッチで調節している。 キッチンから美容院を見る。 敷地の中央を散歩道が抜ける。



ダイニング。 全面ガラス張りであるが、連なる棟により適度にプライバシーと視線の抜けが確保される。天井高は3250で、隣の棟の上越しに空が見え、光が差し込む。

